

津和瀬の平射臨時砲台

―大島砲台の要塞砲を転用した本土決戦用砲台(2)―

池田 拓



図1 砲台1砲門部

1 はじめに

前稿「垂見峠の平射臨時砲台―大島砲台の要塞砲を転用した本土決戦用砲台(1)―」(池田2019)で、宗像市と岡垣町の市境・垂見峠にある平射臨時砲台について述べた。太平洋戦争末期の1945年に、連合国軍の本土上陸に備え建設されたこの砲台は、粗末ながら鉄筋コンクリート製の掩体を備え、地形を巧みに利用していた。備砲は下関要塞の大島砲台から四五式十五糎加農2門を転用した。

大島砲台には4門の備砲があり(池田2016)、そのうち2門は垂見峠に、残りの2門は本稿で述べる砲台に設置された。

調査の結果、この砲台は福岡海岸に上陸しようとする敵を側面から撃つ位置にあり(図2)、構造は丘陵に坑道を水平方向に掘って貫通させ、内陸側を出入口とし、もう一方が海側に開いた砲門部であることを確認した。また、坑道出入口周辺には、砲台を建設した際の作業場の跡も残されていることが分かった。

なお、砲台の名称は資料などに記述がないため、付近の集落名と史料中の表記を合わせ「津和瀬の平射臨時砲台」とした。

2 調査方法

島の南西部に、太平洋戦争末期に建設された砲台があることは、地元の一部島民には知られており、筆者もこの砲台の情報に最初に触れたのは島民からの情報提供だった。

現地調査に先立ち、ウェブ検索による情報収集と、文献資料の収集を行った。それによって砲台の位置や内容をおおよそ知ることができたため、3回の現地調査を行い、遺構・遺物の分布状況と、略測図の作成を行った。

3 調査結果

(1) ウェブ検索

ウェブ上には、これまで現地を訪れた人がその情報を掲載していることがあり、この砲台の位置やおおまかな構造等の一定の情報も知ることができた。ちなみに、前稿の調査でもウェブ検索を使用していたが、そのことを記載していなかったことをここに記す。

(2) 文献調査

『下関重砲兵聯隊史』や『第百四十五師団戦史資料』等の資料から、今回調査した遺構が太平洋戦争末期に建設された平射臨時砲台であり、砲台が建設された経緯やその任務も分かった。

大島砲台からの転用 本土決戦準備が進む昭和20(1945)年2月6日、本土決戦体制に移行するため、従来西部軍に隷属していた下関要塞は、新たに編成された第十六方面軍の戦闘序列に編入された。4月8日の下関要塞守備隊編成を経て、5月21日発令の「陸西

作命甲第三百三十六号」¹⁾により、要塞各砲台の備砲は北部九州沿岸とその島嶼部の戦備強化に転用されることになり、大島砲台の4門は赤間に司令部を置いた第百四十五師団に配属された。

砲台の位置と任務 『第百四十五師団戦史資料』²⁾ 『第五十六軍国土決戦史資料』³⁾に、配属された火砲の位置とその任務が記されている。これによると、昭和20年7月末の段階で、現在の宗像市大島の津和瀬集落南東の丘陵地帯に、西南西向きにカノン2門を装備した平射臨時砲台があつたことが分かる、また戦闘計画案では、大島守備隊の配属海岸砲について「玄海島ニ対シ所在海上ニ現出スル敵艦艇ノ破砕ニ任セシム」とあり、この方向から進攻してくる連合国軍艦艇を攻撃することが任務と記している。

遺構	位置	備考
坑道式砲台1 (出入口)	N33°53'40.22" E130°24'39.02"	出入口前面に土塁
坑道式砲台1 (砲門部)	N33°53'39.26" E130°24'37.83"	完存
坑道式砲台2 (出入口)	N33°53'38.56" E130°24'41.66"	ほぼ埋没
坑道式砲台2 (砲門部)	N33°53'36.04" E130°24'40.76"	半ば埋没
横穴壕1	N33°53'40.82" E130°24'38.25"	ほぼ完存
横穴壕2	N33°53'39.19" E130°24'40.27"	半ば埋没
セメント集積跡	-	約50袋
セメント練箱跡	-	セメントのみ残存
土坑1	-	側壁は石積み
土坑2	-	溜め池状態
丸礫散布地	-	-

表1 踏査結果

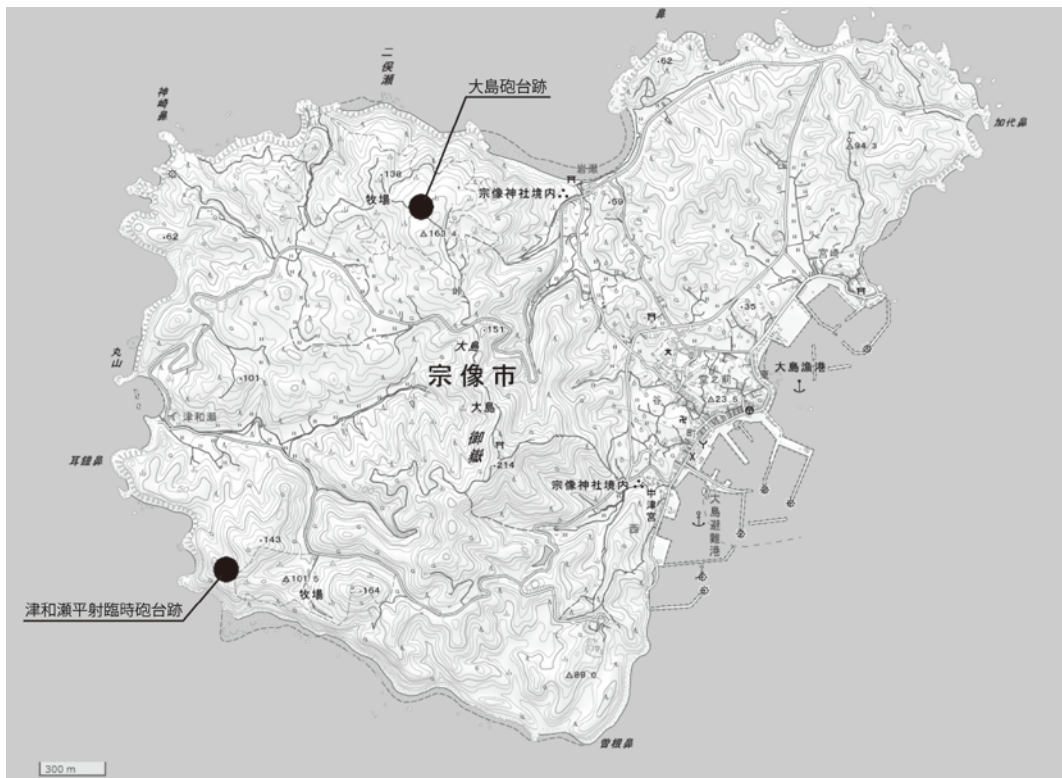


図2 遺跡の位置

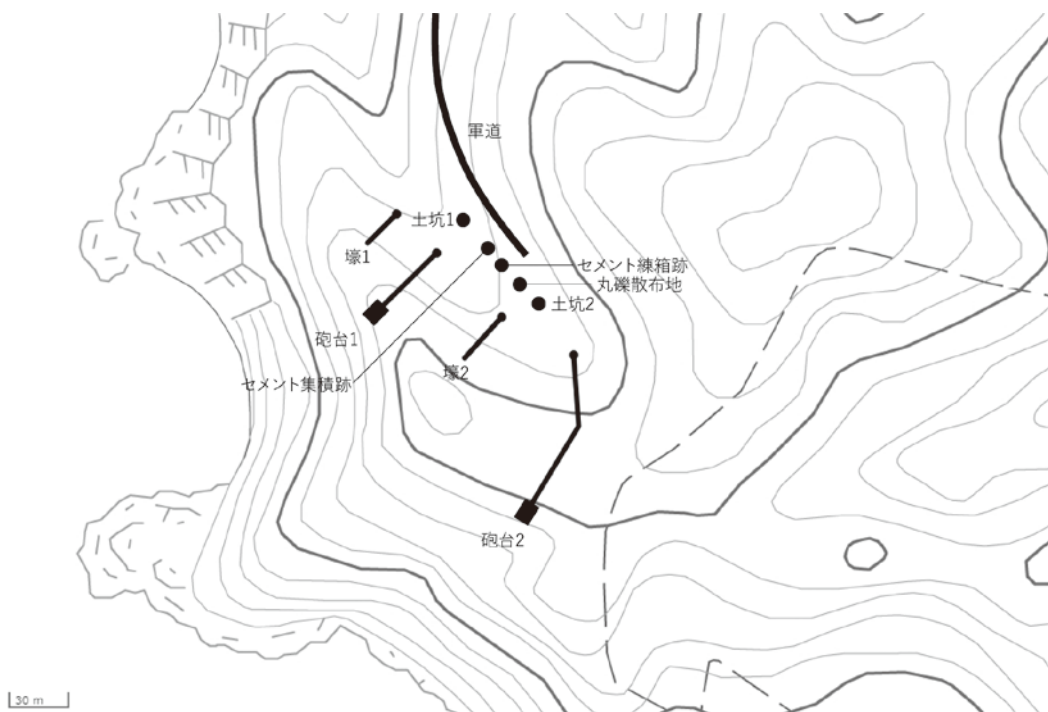


図3 遺構分布図

(3) 現地調査

現地調査は、まず遺跡の位置確認と、関連する遺構・遺物の分布を把握するための踏査を行った(表1)。次に、遺跡における遺構・遺物の位置関係を明らかにするため、携帯式GPS(Garmin eTrex20J)を使用した経緯度計測を実施した(図3)。本稿で記述する数値は、コンベックスで計測できたものはその実測値を、坑道などの遺構はレーザ距離計(BOSCH GLM7000)で計測した計測値を使用している。

坑道式砲台 坑道式砲台は2基あり、本稿では北西側の砲台を「砲台1」、南東側の砲台を「砲台2」とする。

砲台1は、丘陵の谷部に面した標高約85mに開口部がある坑道式砲台で、丘陵腹部を水平方向に貫通した坑道の反対側に、鉄筋コンクリート製掩体の砲門部がある(図4)。砲台の出入口となる開口部は、現況で高さ約1・5m、幅2・9mである。土砂の堆積があるため、建設当時の高さはさらに数十cmあると思われる。出入口の全面には、目隠しをするように高さ約2m、幅10・5mの土の高まりがあり、出入口からの通路はその高まりの両側に分かれるようにY字形に設けられている。この高まりは、周辺地形の観察から、もともとあった斜面を残して通路の部分を掘削することで造られたことが分かる。坑道は長さ約21m、高さ約3・3m、幅約2・5mで、砲門部に達する5・7m手前の左側に、奥行き2・1m、高さ2m、幅2・6mの空間が設けられている。坑道両側には補強のための木製支柱が立てられていた痕跡(柱穴)が残る。床面の一部には、天井から崩落した岩塊や坑木が散乱している(図5)。砲門部は、平面プランが長方形で、アーチ形天井の鉄筋コンクリート製掩体であ

る(図6・7)。掩体内部の寸法は、幅6・0m、奥行き9・0m、最大高3・5mで、鉄筋コンクリートの厚さは0・5〜0・8mである。床面には砲座があり、砲座底部に向けて側壁が斜めに構築されていることから、「四五式十五糎加農改造固定式[㊦]」のものと考えられる。砲門部の前面は遮蔽するものがなく、広々とした玄界灘と、その左手に相島を望むことができる(図8)。

砲台2も坑道式砲台で、砲台1と概ね同様の構造だが、違いとして、坑道が出入口から約36mの部分で右に曲折していることと、出入口前面の土の高まりが無いことが挙げられる(図4)。開口部は埋没しかけており、腹ばいにならないければ入ることができない。坑道は、長さ約61m、高さ約2m、幅2・6mで、砲門部に達する手前の左側に奥行き3・8m、高さ2・2m、幅2・5mの空間が設けられている。砲門部は土砂の流入が激しく、幅6・0m、最大高3・5mで、奥行きは計測不能だったが、砲台1のものと同様と思われる。砲座も流入土砂によりほぼ埋没している。

横穴壕 それぞれの砲台出入口の右側斜面に、1基の横穴壕がある。いずれも1か所の出入口しかなく、単純な直線に掘削された壕である。北西側の壕を「壕1」、南東側の壕を「壕2」とする。

壕1は、砲台1の出入口から約28mの位置に開口部がある、壕は幅1・5m、高さ約1・8m、長さ約11・9mで掘削され、掘削断面は方形である(図9)。壕2は砲台2から約40mの位置に開口部があり、幅約2・3m、高さ約2・4m、長さ約17・3mで、掘削断面は方形である。この2基の壕では、支柱などの跡は確認できなかった。

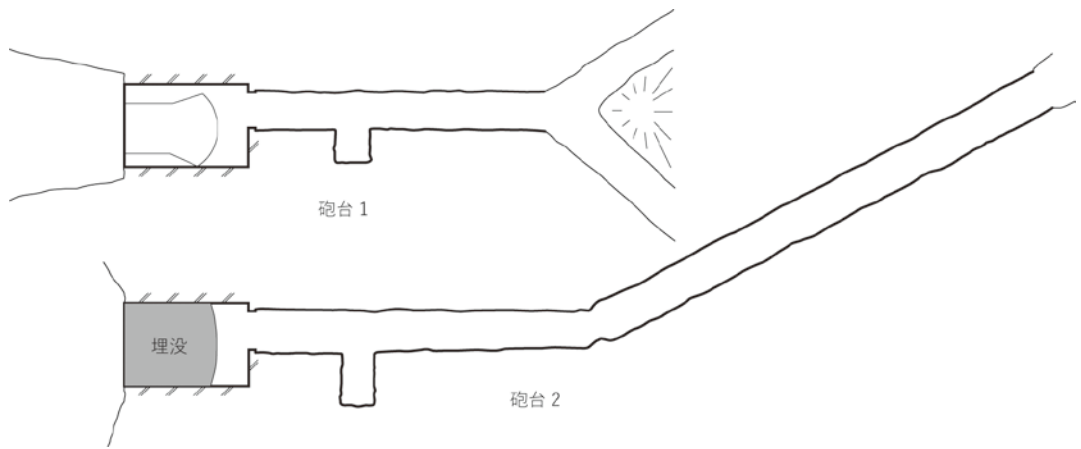


図4 砲台略測図



図5 砲台1坑道内部



図6 砲台1砲門部



図7 砲台1砲門部



図8 砲台の射界に入る海面

作業場 砲台の出入口がある丘陵谷部には、砲台の建設工事のため

の作業場跡が遺されている、地表面で確認できる遺構・遺物は、セメント集積跡、セメント練箱跡、土坑、散乱した大量の丸礫である。

セメント集積跡は、袋詰めセメントが集積された状態のまま凝固した遺構・遺物である(図10)。当時のセメントは紙袋に詰められていたため、袋が風化して凝固した中身(セメント)だけが袋詰めされた形のまま遺っている。表面に雫れた紙袋の皺の痕跡が付くものもある。凝固した袋詰めセメントは、縦60cm、横40cmで、約50個を確認した。

セメント練箱跡は、木製の練箱でセメントと水を混合していた状態のままセメントが凝固したもので、現在は木製の箱が失われ、側面に板目の跡がある長辺2・7m、短辺1・9m、高さ約0・6mの方形のセメントの塊である(図11)。

セメント集積跡から谷部を約8m下った場所に、炭焼き窯のような、石で側壁を補強した直径2・6mの土坑を確認した(図12)。流入土のため正確な深さは分からなかったが、現況で深さ0・3mを測る。また、セメント練箱跡から谷部を約20m上った場所に、長辺約6・5m、短辺約4・9mの土坑があり、現在は水が溜まって池のようになっている。この土坑からセメント練箱跡にかけて、大量の丸礫が散乱している。このような丸礫は周辺の土中に見られない。

軍道 津和瀬集落南方の山際(現在貯水池)から、砲台のある場所まで造られた軍道が、現在も良好に遺っている。

4 考察

この平射臨時砲台は、四五式十五糎加農改造固定式(9)2門を装備する坑道式砲台である。陸軍が作成したマニュアル『坑道式陣地ノ参考』には、平面プランが類似する砲台の例が図示されており(図13)、沖縄県八重瀬町のクラシンジョウの砲台跡は、この図と平面プランが酷似している(図14)。本遺跡も図中の「棲息掩蔽部兼通路」と「観測所」が確認できないものの、ほかの平面プランは近似しており、建設時にこのようなマニュアルを参考にした可能性がある。Y字形に分かれた出入口は、図13中に示され、また沖縄県南風原町の南風原陸軍病院壕群でも、発掘調査でこのような壕出入口前面の盛土(南風原陸軍病院壕群では掘削土で造成)が検出され、目隠しと爆風除けの機能があつたとしている。これらのことから、出入口前面の遮蔽のための土盛りは普遍的なもので、本遺跡の場合も目隠しや爆風除けの機能を有していたと考えられる。砲台1、2の出入口の外側にある横穴壕は、図13を参考にすれば兵士の「棲息掩蔽部」もしくは「弾薬置場」であることが想定できる。

作業場跡の状況は、この砲台の建設が完了していないことを示している。セメントを練っている途中で放棄していることから、さらにセメントを使用する作業が予定されていたと考えられる。また、確認した土坑はその機能を特定することができないが、至近距離にセメント練り箱などがあることから、そこで使用する水の溜場だった可能性もある。大量に散乱する丸礫は、津和瀬で民宿を営む住民によると、親から聞いた話として、砲台建設中は陸軍の事務所が現在の民宿「津和瀬」の敷地に置かれ、住民が砲台建設作業に加わり、



図9 壕1



図10 セメント集積跡



図11 セメント練箱跡



図12 集積跡下の土坑

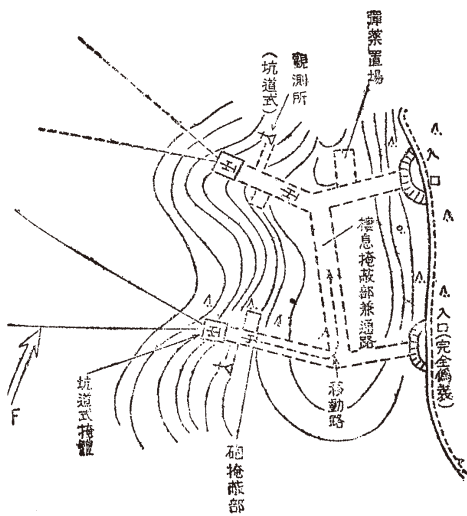


図13 『坑道式陣地ノ参考』中の例

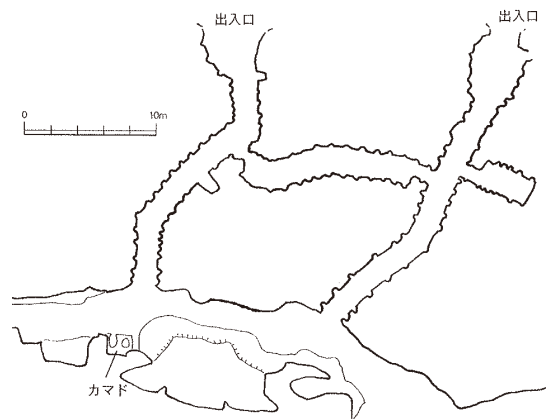


図14 クラシジョウ砲台跡略測図 (一部)

海岸から大量の石を運んだことを聞いたという。この丸礫はその際に運ばれたものである可能性があり、仮にそうであればセメントの骨材として使用されたことが考えられる。

5 おわりに

前稿と今回の調査によって、海上交通路の掩護のために建設された大島砲台の火砲が、本土決戦に向けた配備によってどのように転用されたのかを明らかにできた。また、オーラルヒストリーとして砲台の建設作業に大島の住民も加わったことが分かったことで、これまで知られていなかった太平洋戦争末期の島民と軍隊との関わり方の一部も示すことができたのは、間接的とはいえ戦争の記憶が失われていく現在の状況において非常に幸いだった。

註

- (1) 睦16HA(西部軍管区) 参謀部「睦西作命甲第百三十六号 第十六方面軍命令 福岡 五月二十一日十五時」(昭和20年5月21日)『第十六方面軍作命綴 昭二十・二・二一九・一五』
- (2) 第百四十五師団司令部「第三 作戦諸計画 其ノ一 第百四十五師団戦闘計画(案)」(昭和20年11月) 防衛省防衛研究所蔵『第百四十五師団戦史資料』。
- (3) 第五六軍司令部「第五十六軍配備要図 於昭和二十年八月十五日 集成五万分一地形図」(昭和20年11月) 防衛省防衛研究所蔵『第五十六軍国土決戦史資料 昭二十・一』の図中記号による。
- (4) 日本国内の袋詰めセメントは、大正13(1924)年、メートル法採

用と同時に50kg紙袋に統一された(一般社団法人セメント協会 http://www.jcassoc.or.jp/cement/1jpn/jy_91.html)。

参考文献

- 池田拓 2016 「大島砲台の研究」『七隈史学』18、七隈史学会
- 池田拓 2019 「垂見峠の平射臨時砲台―大島砲台の要塞砲を転用した本土決戦用砲台(2)―」『宗像市史研究』2、新修宗像市史編集委員会
- 池田榮史 2019 『沖縄戦の発掘 沖縄陸軍病院南風原壕群』新泉社
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015 『沖縄県の戦争遺跡』沖縄県埋蔵文化財センター
- 教育総監部 1945 『坑道式陣地ノ参考』防衛省防衛研究所蔵資料
- 佐山二郎 2011 「四五式十五糎加農」『日本陸軍の火砲 要塞砲』光人社
- 下関重砲兵連隊史刊行会 1985 「下関要塞と下関重砲兵連隊」『下関重砲兵連隊史』下関重砲兵連隊史刊行会
- 防衛庁防衛研修所戦史室 1972 『戦史叢書 本土防衛作戦(2)九州の防衛』朝雲新聞社

(いけだたく 原始・古代部会)